

「V すぎだ」の補文構造と意味構造

-内項主語構造と結果状態の焦点化-

新山 聖也

キーワード：すぎだ、内項主語構造、上昇構造、結果状態の焦点化

1. はじめに

統語的複合動詞「V すぎる」は過剰の意味を持つが、何が過剰であるかの解釈にはいくつかのパターンがある。(1a)は「水道が何度も止まる」という出来事の頻度が多いという解釈(以下、頻度解釈)、(1b)は「肉の焼け具合が過剰である」という結果の度合いが大きいという解釈(以下、結果解釈)である。

- (1) a. 最近、宿舎の水道が止まりすぎている。
- b. 肉が焼けすぎている。

本稿は、上記の意味解釈について、「V すぎる」の名詞化形式である「V すぎだ」に着目する。「V すぎだ」においては、(2b)のように他動詞の目的語が主語となる内項主語構造(新山 2020, 2022a)が存在する。(2)の通り、結果解釈の場合は(2a)の「非対格自動詞+すぎだ」も、(2b)の内項主語構造の「他動詞+すぎだ」も、自然な文となる。一方、(3)の通り、頻度解釈においては、「非対格自動詞+すぎだ」が許容されるのに対して、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」は不自然な文になる。

- (2) a. ジュースが冷えすぎだ。(結果解釈)
- b. ジュースが冷やしすぎだ。(結果解釈)
- (3) a. 最近、宿舎の水道が止まりすぎだ。(頻度解釈)
- b. *最近、宿舎の水道が止めすぎだ。(頻度解釈)

このように、「V すぎだ」に見られる内項主語構造においては、特定の解釈が制限される場合がある。本稿では、由本(2012)による「V すぎだ」の意味構造に関する分析、新山(2022a)による「V すぎだ」の補文構造に関する分析を踏まえ、(3)のような意味解釈の対立について分析を行う。更に、意味解釈の分析を通じて、補文構造と意味構造の関係を明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。2節で研究の背景として、「V すぎる」と「V すぎだ」

本稿は、著者の博士論文の一部を加筆・修正したものである。

積)における意味構造であり、内項に当たる y に過剰の意味 (TOO) が付与される¹。

続いて、「V すぎだ」における過剰の解釈について確認する。由本 (2012) は、名詞化形式である「V すぎだ」が修飾部に生起する事例を取り上げて、意味構造を分析する研究である。由本 (2012) は、外項を叙述対象とする場合と内項を叙述対象とする場合で異なった 2 種類の「すぎだ」を仮定する分析を提案しているが、(3) のような対立は内項を叙述対象とする場合に見られる対立であるため、ここでは、内項を叙述対象とする「V すぎだ」の議論を概観する²。由本 (2012) は、内項を叙述対象とする場合、「V すぎる」とは異なった解釈の分布が見られることを指摘している。

以下の通り、「V すぎだ」が修飾部に生起する事例において、内項が叙述対象となる場合、(6) や (7) のような結果解釈の場合は問題なく容認されるのに対し、(8) のような頻度解釈の事例が容認されないことを指摘している。

(6) 冷やしすぎのビールやゆですぎのパスタは美味しくない。

(7) 冷えすぎのビール、下がりすぎの物価、伸びすぎの髭

(由本 2012 : 131, 133 抜粋)

(8) *使いすぎの方策、*読みすぎの本

(由本 2012 : 137 抜粋)

量解釈に関しては動詞によっては解釈が制限されるという指摘もあるが、(9a,b) のような作成動詞や出現動詞や (10) のような場所が叙述対象の場合には量解釈が可能であると説明されている。よって、制限はあるものの、量解釈自体は可能と考えられる。

(9) a. 作りすぎの菓子を犬にやる。

b. ?生まれすぎの子猫を世話している。

(10) 荷物を入れすぎの鞆、荷物を載せすぎのトラック

(由本 2012 : 137 抜粋)

由本 (2012) は意味解釈の可否について、語彙概念構造 (LCS) を用いた説明を行っている。そこでは、「V すぎだ」の語彙概念構造においては、STATE (網掛け部分) が焦点化されるため、その内部の要素に限り過剰の意味 (TOO) が付与されるという分析を提案している。(11a) は結果解釈となる「ゆですぎの (パスタ)」の意味構造を示したものであり、(11b) は量解釈となる「物を入れすぎ (の鞆)」の意味構造を示したものである。(11) においては、いずれも STATE の内部に過剰のターゲットが存在するため、結果解釈や量解釈

¹ (5c) の「壊し過ぎる」については、量ではなく壊れ具合が過剰であるという解釈も存在するが、その場合、[THING y]ではなく[AT-BROKEN (+gradable)]に TOO が付与されるものと考えられる。

² 由本 (2012) は、内項を叙述対象とする「V すぎだ」について、「V が含意する結果状態の行き過ぎや数量の過剰を表す場面レベル述語としての「V+すぎ」(p.138)」、外項を叙述対象とする「V すぎだ」について、「V が表す事象の (様々な意味での) 行き過ぎを履歴属性として表す「V+すぎ」(p.138)」と説明している。

が成立する。一方で、頻度解釈においては、時空間項 ((5a) における e) が STATE の内部に存在しないため、「V すぎだ」においては頻度解釈が成立しないことになる。このような STATE を焦点化する操作の存在は、(12) のように、「V すぎだ」において外項の顕在化が抑制される事実からも確認できると説明されている。

- (11) a. [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME[_{STATE} y BE [AT TOO [BOILED (+gradable)]]]]]
 b. [x CONTROL[x CAUSE [BECOME [_{STATE} TOO[_{THING} y]BE[IN z]]]]]

(由本 2012 : 140)

- (12) *花子がゆですぎの Pasta、*お母さんが作りすぎのクッキー (由本 2012 : 140)

本稿では、語彙概念構造の STATE を焦点化する操作について「結果状態の焦点化」と呼ぶことにする。これは、金水 (1994) を受けて影山 (1996) で仮定される結果状態の焦点化という操作が、由本 (2012) が仮定する操作と同様のものであることに基づく。金水 (1994)、影山 (1996) との関係については、5 節で詳細を述べる。

以上の通り、由本 (2012) では、「V すぎる」と「V すぎだ」における解釈の可否を意味構造に基づいて説明している。しかしながら、由本 (2012) は、現象観察を修飾部に絞っている点で問題がある。1 節で示した通り、述部においては、頻度解釈の可否に対立がみられる。由本 (2012) の説明では、他動詞 (内項主語構造) と非対格自動詞における対立を説明することができず、(3) のような対立について明らかにする必要がある。

2.2 「V すぎだ」の補文構造

2.2 節では、「V すぎだ」の補文構造について取り上げる。新山 (2020, 2022a) では「V すぎだ」「V かけだ」「V ばなしだ」「V たてだ」のような形式において、(13) のように他動詞の目的語 (内項) が主語相当の項としてふるまう現象の存在が指摘されている。新山 (2020, 2022a) は (13) のような構造について、内項主語構造と呼んでいる。

- (13) ジュースが冷やし {すぎ/かけ/っぱなし/たて} だ。 (新山 2022a : 58)

新山 (2022a) は、(14) のイディオム解釈に関する対立から、目的語が主語としてふるまう形式の中でも、受動文と内項主語構造が対立を示すことを指摘している。「拍車をかける」「手を入れる」は受動文においても成立するイディオム (cf. Fujimaki 2005) であるが、内項主語構造においてはイディオム解釈が成立しない。

- (14) a. 太郎の発言によって議論に拍車が {かけられた/#かけすぎだ}。
 b. 先生によって論文に手が {入れられた/#入れっぱなしだ}。

(新山 2022a : 60)

一方で、新山（2022a）は、内項主語構造を取らない場合、「V すぎだ」類において（15）のようにイディオム解釈が問題なく可能であることも指摘している。つまり、「非対格自動詞+すぎだ」の主語がそのまま主語としてふるまう文と、「他動詞+すぎだ」の目的語が主語となる文で、異なる構造を仮定する必要があると考えられる。

- (15) a. 太郎の発言によって議論に拍車がかかりすぎだ。
b. 先生によって論文に手が入りっぱなしだ。
c. この商店街は、閑古鳥が鳴きかけた。 (新山 2022a : 61)

統語的複合動詞の議論においては、補文節の主語が文の主語となる上昇構造と主節の主語が文の主語となるコントロール構造の存在が仮定されるが、上昇構造ではイディオム解釈が成立し、コントロール構造ではイディオム解釈が成立しない事実が指摘されている（Nishigauchi 1993, 岸本 2005）。統語的複合動詞の対立に倣う形で、新山（2022a）は、「V すぎだ」類に（16a）の上昇構造のパターンと（16b）の内項主語構造のパターンが存在することを仮定している。（16a）は補文節の主語が文の主語となり、（16b）は主節の主語が文の主語となっている³。

- (16) a. ジュース_iが[_{vP} t_i 冷え]すぎだ。
b. ジュース_iが[_{vP} PRO_{arb} pro_i 冷やし]すぎだ。

なお、内項主語構造は、主節の主語が補文節の目的語と同一指示関係を結ぶ点で、コントロール構造とは異なった構造である。新山（2022a,b）は、内項主語構造について、「V すぎだ」が名詞性を持つ複雑述語であることに由来する構造であると主張している。

このように、「V すぎだ」においては、上昇構造を取るパターンと内項主語構造を取るパターンが存在する。これを踏まえて考えると、(3)の対立は、動詞の種類による対立だけではなく、上昇構造を取る「非対格自動詞+すぎだ」と内項主語構造を取る「他動詞+すぎだ」における対立と言える。よって、(3)の対立について説明するためには、2.1節で確認した意味構造と2.2節で確認した補文構造の対応関係を含めて、議論を行う必要がある。更に、由本（2012）の説明では外項の顕在化が抑制される現象を意味構造によって説明しているが、新山（2022a）は（16）のように統語構造に外項が存在する構造を示している。このような統語と意味の対応関係に関しても、議論の余地が残されている。

³ 新山（2020,2022a）は、イディオム解釈のほかに（16）の構造を仮定する根拠として、深く埋め込まれた目的語の主語化や量量子の解釈の違いといったデータを提出している。

3. 現象観察

2節では、冒頭に示した「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」の対立において、補文構造と意味構造の関係を議論する必要があることを示した。3節では、まず、「Vすぎだ」における意味解釈の可否について整理を行うため、現象観察を確認する。

まず、「Vすぎだ」における結果解釈と量解釈の可否を観察する。結果解釈については、由本(2012)の観察の通り、(17)のように「非対格自動詞+すぎだ」であっても、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」であっても、問題なく許容される。量解釈についても、由本(2012)の観察と同様に、場所句が生起する(18)の例では「非対格自動詞+すぎだ」であっても内項主語構造の「他動詞+すぎだ」であっても問題なく許容される。よって、本稿では、量解釈に関して、補文構造や意味構造のレベルでは意味解釈が排除されないものとする。

- (17) a. 肉が {焼け/焼き} すぎだ。(結果解釈)
b. ジュースが {冷やし/冷え} すぎだ。(結果解釈)
- (18) a. トラックの荷台に荷物が {載り/載せ} すぎだ。(量解釈)
b. 鞆の中に物が {入り/入れ} すぎだ。(量解釈)

次に、「Vすぎだ」における頻度解釈の可否を観察する。(19)のように、上昇構造の「非対格自動詞+すぎだ」においては頻度解釈が可能だが、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」においては頻度解釈が許容されない⁴。

- (19) a. 最近、宿舎の水道が {止まり/*止め} すぎだ。(頻度解釈)
b. 最近、アパートの鍵が {なくなり/*なくし} すぎだ。(頻度解釈)
c. 最近、店の前にある看板が {倒れ/*倒し} すぎだ。(頻度解釈)

そして、修飾句をターゲットとする統語的解釈においても意味解釈に関する対立が見られる。(20)のように様態をあらわす修飾句をターゲットとする解釈は内項主語構造において成立しない。

- (20) a. 荷物が素早く {届き/*届け} すぎだ。(素早過ぎる)
b. ドアが勢いよく {開き/*開け} すぎだ。(勢いが良すぎる)

⁴ 同じ「他動詞+すぎだ」であっても、以下の通り、外項を主語とする場合は頻度解釈が許容されるため、他動詞の使用によって不適格になっているわけではなく、あくまで内項主語構造が持つ制約と考えられる。この点については4節でも言及するが、外項を主語とする「Vすぎだ」については脚注1で述べた通り、由本(2012)において内項を主語とする「Vすぎだ」とは扱いが異なっている。

i a. 宿舎の管理者が宿舎の水道を止めすぎだ。(頻度解釈)
b. 太郎がアパートの鍵をなくしすぎだ。(頻度解釈)

様態修飾句は、語彙概念構造上の ACT や BECOME に関わる意味を持つと考えられ、STATE の外側の要素を修飾するものと考えられるが、このような様態修飾句をターゲットとする解釈も内項主語構造では成立しない。

ここまでに見た「V すぎだ」の解釈は、以下の表 1 のようにまとめられる。

【表 1】 「V すぎだ」において許容される過剰の解釈

	補文構造	結果	数量	頻度	様態修飾句
非対格自動詞+すぎだ	上昇構造	○	○	○	○
他動詞+すぎだ	内項主語構造	○	○	×	×

表 1 からは、内項主語構造において STATE の外部をターゲットとする頻度解釈などが排除されることがわかる。よって、結果状態の焦点化を仮定する由本 (2012) の分析は、内項主語構造の「V すぎだ」に対して一定の説得力を持つと考えられる。一方で、由本 (2012) の議論では上昇構造の「非対格自動詞+すぎだ」と内項主語構造の「他動詞+すぎだ」の対立を説明することはできず、議論に修正が必要であると考えられる。

4. 「V すぎだ」の意味構造と頻度解釈

4 節では、3 節の現象観察に従って、意味解釈について意味構造と補文構造の観点から説明を試みる。ここでは、由本 (2012) の語彙概念構造による分析に修正を加える形で説明を行う。結論を述べると、結果状態の焦点化について、内項主語構造の「V すぎだ」においてのみ起こる操作であると仮定することで、頻度解釈の可否を説明する。

由本 (2005) において、頻度解釈は時空間項 (e) を過剰のターゲットとする解釈とされていた。結果状態の焦点化が内項主語構造においてのみ起こると仮定すると、上昇構造の「非対格自動詞+すぎだ」の意味構造は (21)、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」の意味構造は (22) となる。

- (21) a. 水道が止まりすぎだ。
 b. $\lambda x \text{TOO} \lambda e [\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [\text{STOP}]]]]$
- (22) a. *水道が止めすぎだ。
 b. * $\lambda x \text{TOO} \lambda e [[x \text{ ACT ON } y] \text{CAUSE}[\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [\text{STOP}]]]]]$

(21) においては結果状態の焦点化が起こらず、時空間項 (e) を過剰のターゲットとする解釈が可能である。一方、(22) においては結果状態の焦点化が起こるため、時空間項 (e) を過剰のターゲットにすることができない。よって、(22) の内項主語構造では、頻度解釈が排除されることになる。

このように、内項主語構造においてのみ結果状態の焦点化が起こると仮定することで、「V

すぎだ」における頻度解釈の可否を適切に説明することができる。また、3節で観察した様態修飾句に関しても、STATE 内部に様態と関わる ACT や BECOME が存在しないため、様態修飾句をターゲットとする解釈が排除されるものと考えられる。

また、結果状態の焦点化が起こる環境が、「他動詞+すぎだ」ではなく、内項主語構造に制限されることも確認しておく。前述の通り、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」では頻度解釈が制限されるが、(23) のように、外項が主語となるような上昇構造の「他動詞+すぎだ」では頻度解釈が問題なく許容される。この事実は、結果状態の焦点化が、「他動詞+すぎだ」という動詞の種類のみの問題ではなく、内項主語構造という補文構造と対応していることを示唆している。

- (23) a. 宿舎の管理者が宿舎の水道を止めすぎだ。(頻度解釈)
b. *宿舎の水道が止めすぎだ。(頻度解釈)

4節では、由本(2012)の説明を修正する形で議論を行い、結果状態の焦点化という意味論的操作が、内項主語構造という補文構造と連動することを指摘した。一方で、なぜ内項主語構造において結果状態の焦点化が起こるのか、という点については疑問が残る。よって、5節では、「V すぎだ」における補文構造と意味構造の関係について考察を行う。

5. 補文構造と意味構造の関係

4節では、意味解釈の対立が補文構造と対応関係を持っていることを指摘した。5節では、内項主語構造と結果状態の焦点化について議論を行い、補文構造と意味構造の関係について明らかにする。

2節で言及したように、由本(2012)以前にも形容詞的タ形の議論において結果状態の焦点化を仮定する分析が示されていた。(24)のように、タ形には過去をあらわすもの他に、連体節でテイルに相当する状態的意味をあらわす(24c)のような形容詞的タ形が存在する。

- (24) a. 去年一年間で3回車が変わった人を知っている。(過去)
b. 彼は3度目に変わった車をもう売る気だ。(既然・完了)
c. こんどはちょっと変わった車を買おうと思っている。(形容詞的)

(金水 1994 : 29)

形容詞的タ形は、タが状態の意味を表す点や、「#太郎が茹でた卵」のように外項が抑制されるという点で特徴を持つ。金水(1994)は、このような形容詞的タ形について、語彙概念構造において結果状態を焦点化する(25)の操作が行われることを仮定し、これを「結果状態の焦点化(金水 1994 : 45)」と呼んでいる。更に、金水は、焦点化が(26)の効果を持つと分析している。金水の分析では、語彙部門の後に統語部門で統語構造が派生されるという枠

組みにおいて、形容詞的タ形のタは語彙部門で付加され、語彙概念構造の段階で外項の写像が抑制されることになる。よって、そもそも統語構造に外項が現れないものと考えられる。

- (25) 動詞の語彙概念構造上から、(あれば) 結果の状態 (STATE 節点以下) を「焦点化」せよ。 (金水 1994 : 49)
- (26) 焦点化の効果 :
- a. 動詞全体の意味を STATE と見なせ。
 - b. 項構造への外項の写像を抑制せよ。 (金水 1994 : 49)

一方、影山 (1996) では、「金水 (1994) は、「た」の派生が直接に語彙概念構造に適用することを提案しているが、本書では、「た」の統語的な性格を重んじて、「た」の解釈規則が語彙概念構造に言及して行われるものと考えておこう (影山 1996 : 133)」とし、統語構造の派生の後に語彙概念構造で結果状態の焦点化が起こるという分析を示している⁵。影山 (1996) は、結果状態の焦点化を「概念構造の STATE (すなわち y BE AT-z) の部分全体にハイライトを当てる (影山 1996 : 134)」という操作と見なし、由本 (2012) で仮定される STATE を焦点化する操作と同様の操作が仮定されているものと考えられる。

形容詞的タ形と結果状態の焦点化をめぐる議論においては、結果状態の焦点化がどの段階で起こるか、という意見に対立が見られる。金水はそもそも統語構造上に外項が写像しないという仮説を示したが、影山は統語構造が派生された後に語彙概念構造で結果状態の焦点化が起こるという操作を示した。ただし、影山 (1996) の分析では、結果状態の焦点化が起こる場合の外項の扱いは判然としない。統語構造上に外項が存在するのか、あるいは統語構造の派生の後に外項が削除されるのかという点には言及がない。

議論を「V すぎだ」に戻すと、由本 (2012) においても同様の言及が見られる。由本は STATE を焦点化する操作について「残された問題は、(略) 概念構造上での操作が、どの段階で起こるものかということである。(略)「加熱しすぎの食品」のように統語的派生によるとされる「動名詞+する」が結合できることから、語彙部門での派生とする分析では問題がある (由本 2012 : 142)」と述べている。ここでも、「V すぎだ」が統語部門で派生される以上、結果状態の焦点化という意味論的操作をどのように位置づけるかが問題視されている。また、由本 (2012) においても同様に統語構造上の外項の扱いは明示的ではない。

このような問題点について、本稿では、「V すぎだ」においては統語構造に基づいて意味論的操作が起こるという分析を提示する。具体的には、「V すぎだ」の統語構造において外項の顕在化が抑制されることをトリガーとして、結果状態の焦点化という意味論的操作が適用されるという分析を提案する。

まず、統語構造に外項が写像されないという金水 (1994) の分析、あるいは結果状態の焦点化によって外項が削除されるという分析は、「V すぎだ」には適用できない。その根拠と

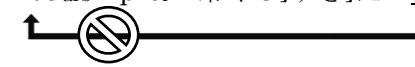

⁵ 影山 (1996) の枠組みに対する批判および論点の整理については、三宅 (2017) を参照。

して、(27) の例が挙げられる。(27) のように、内項主語構造において他動詞の主語が原因であるという解釈は排除され、動作主であるという解釈に限られる。よって、内項主語構造においては、統語構造上に動作主と解釈される外項 (PRO) が存在するものと考えられる。

(27) ?足跡が綺麗に消しすぎだ。

- a. *「大雪が足跡を綺麗に消した」という原因項解釈
- b. 「犯人が足跡を綺麗に消した」という動作主項解釈 (新山 2022a : 64 改変)

次に、外項の顕在化の抑制は、統語構造によって説明が可能であり、意味論的操作を仮定しなくても説明できる。新山 (2020) では、時制辞が主格を付与するという前提 (cf. 竹沢・Whitman1998) に立ち、内項主語構造において、時制辞 (T) による主格付与が阻止されるために外項が抑制されるという分析が提示されている。前述の通り、内項主語構造においては顕在的な外項が出現せず、非顕在的な PRO が出現する。新山 (2020) はこの事実について、「すぎ」という主節の名詞述語要素の介在によって主節の時制辞から補文節の外項に対する主格付与が阻止されるため、(28a) のように、外項が主格を得ることができず、顕在的な外項が生起できないと主張している。(28b) のように、補文節の内部に時制辞が存在する「ままだ」において外項の顕在化が抑制されない事実も、主格付与の有無によって外項の顕在化の可否が決定される分析を支持している。

- (28) a. [TP ジュース_i が [NP [vP PRO_{arb} pro_i 冷やし] すぎ] だった]
- 
- b. [TP ジュース_i が [NP [TP 太郎が pro_i 冷やした] ままだ] だった]
- 

このように、内項主語構造において外項の顕在化が抑制される現象は、内項主語構造の統語的性質によって説明することができる。更に、4 節までに見たように、「V すぎだ」における結果状態の焦点化は、内項主語構造という補文構造に連動して引き起こされる操作である。このような補文構造と意味構造の関係を説明するため、本稿では補文構造と意味構造の連動関係について (29) の分析を提案する。

- (29) a. 内項主語構造においては、外項への主格付与が阻止されることによって、外項の顕在化が抑制される。
- b. 内項主語構造においては、外項の顕在化が抑制されるために、意味構造上の動作主が背景化され、それに基づいて結果状態の焦点化が起こる。

(29) では、意味論的操作の結果として外項が抑制されるのではなく、統語構造における主

格付与の阻止によって外項の顕在化が抑制され、更に外項の顕在化が抑制されることによって結果状態の焦点化が起こるという順序で補文構造と意味構造の対応関係を説明している。この分析では、影山（1994）や由本（2012）で不明瞭な部分であった統語構造上での外項の位置付けを明らかにした上で、由本（2012）で問題視されていた結果状態の焦点化の位置付けについても、統語構造上の外項の顕在化が抑制されることによって引き起こされる操作として位置付けている。

興味深いことに、形容詞的タ形においても、「Vすぎだ」と同様に、時制辞の不在による主格付与の阻害が起きている可能性がある。前提として、田川（2010）では、形容詞的タ形におけるタが[+stative]という素性を持つ機能範疇 Asp であると仮定されている。そして、(30a) のような「濡れているタオル」というテイル形に対して (30b) のように「濡れたタオル」には時制辞が欠如しているという分析を提示している。

- (30) a. [NP[TP[VP[AspP[VP e_i 濡れ]て]いる]タオル]
 b. [NP[AspP[VP e_i 濡れ]た]タオル]

(田川 2010 : 194-195 のツリーをブラケット表記に書き直した)

田川（2010）は、(30b) の構造を仮定する証拠の一つとして、外項に関する観察を提示している。「優れる」のような第四種の動詞は主節で過去をあらわすタ形を取れない。よって、(31) の「優れた」はテイル形に相当する形容詞的タ形と特定できるが、テイル形において外項が生起できるのに対し、形容詞的タ形において外項が生起できない。

- (31) a. その女性が *優れた／優れている プログラミングの能力
 b. 優れた／優れている プログラミングの能力 (田川 2010 : 195)

このように、内項主語構造と形容詞的タ形は、結果状態の焦点化という意味論的操作だけでなく、外項が時制辞から主格付与を受けることができないという統語論的性質も共通している。よって、外項の顕在化が抑制されることによって、結果状態の焦点化が起こるという (29) の分析は、形容詞的タ形においても適用できる可能性がある⁶。

ここまでの議論の通り、5 節では「Vすぎだ」における補文構造と意味構造の関係を取り上げ、「Vすぎだ」の補文構造に起因して結果状態の焦点化という意味論的操作が引き起こされるという分析を提案した。

⁶ ただし、形容詞的タ形において「Vすぎだ」とまったく同じ分析を適用できるかについては更なる議論が必要である。「Vすぎだ」においては補文構造によって意味解釈の対立が存在するが、形容詞的タ形において同様の対立が確認できないためである。この点については、結果状態の焦点化を起こさない「非対格自動詞+すぎだ」も状態的意味を持つことから、状態的意味の付与と結果状態の焦点化の違いについて整理を行うことで形容詞的タ形についても包括的に扱える可能性があると考えている。

6. 議論の拡張

本稿で取り上げた「V すぎだ」は、「V かけだ」「V ばなしだ」「V たてだ」等と内項主語構造を持つ点で共通点を持ち、これらの形式は新山（2022b）において統語的述語名詞として分類されている。6 節では、「V すぎだ」以外の統語的述語名詞においても、内項主語構造と結果状態の焦点化が連動していることを示し、議論の拡張を行う。

臼杵（2011）では、「V ばなしだ」の解釈の一つに「繰り返し読み」という解釈の存在が指摘されている。繰り返し読みとは「次から次へと」のような副詞と共に起る際にイベントが繰り返されることを意味する解釈である。しかしながら、繰り返し読みの解釈は、(32) の通り、上昇構造の「非対格自動詞+ばなしだ」において成立するが、内項主語構造の「他動詞+すぎだ」においては成立しない。

- (32) a. 次から次へと本が {倒れ/*倒し} っぱなしだ。(繰り返し読み)
b. 次から次へと事故が {起こり/*起こし} っぱなしだ。(繰り返し読み)

本稿の範囲で「V ばなしだ」の意味構造について詳細に議論を行うことはできないが、繰り返し読みはイベントの頻度に言及する点で、「V すぎだ」における頻度解釈と共通している。よって、「V すぎだ」の頻度解釈の同様に繰り返し読みが時空間項をターゲットとする解釈であると仮定すると、(32) の対立を説明できる。すなわち、「V ばなしだ」においても、内項主語構造では結果状態の焦点化が起こるため、時空間項をターゲットとする解釈が排除されるものと考えられる。

また、宮腰（2009）は、「V かけだ」について「途中読み」と「開始前読み」という解釈の存在を指摘している。「チョコレートが溶けかけだ」は溶けている途中という結果状態に関わる途中読みの解釈であるが、それに対して「火が消えかけだ」は火が消える直前であるという解釈であり、これが開始前読みである。そして、「V かけだ」の開始前読みも、(33) のように内項主語構造では成立しない解釈である。

- (33) a. 火が {消え/*消し} かけだ。(開始前読み)
b. 棚から本が {落ち/*落とし} かけだ。(開始前読み)
c. あと一歩で事故が {起こり/*起こし} かけだ。(開始前読み)

開始前読みは頻度と関わる解釈ではないが、イベントが発生する直前を問題とする点で、時空間項をターゲットとする解釈であると考えられる。つまり、「V かけだ」においても、結果状態の焦点化によって時空間項をターゲットとする解釈が排除されるという分析が可能である。

最後に、「V たてだ」においては時期をあらわす解釈の有無という形で上昇構造と内項主語構造の対立が確認できる。山田（2005）で指摘されているように、「V たてだ」は意味構

造上に STATE を持つ動詞を取る。このため、山田 (2005) は「V たてだ」そのものが語彙概念構造上の STATE を取りたてるという (結果状態の焦点化に相当する) 意味論的操作を起こすものと分析している。しかしながら、「V たてだ」についても、主語の結果状態をあらゆる解釈だけではなく、主語に変化が起こった時期をあらゆる解釈が存在し、(34) のように上昇構造と内項主語構造で対立が見られる。

- (34) a. 桜の花が咲きたてのころに、太郎と次郎は出会った。
b. *チューリップが植えたてのころに、太郎と次郎は出会った。
(cf. チューリップを植えたころに、太郎と次郎は出会った。)

本稿で「V たてだ」の時期をあらゆる解釈について詳細に議論を行うことはできないが、このような解釈も時空間項をターゲットとする解釈と捉えて不自然ではなく、結果状態の焦点化によって時空間項に関わる解釈が排除されるものと考えられる。

このように、補文構造の対立と結果状態の焦点化に関する分析は、「V すぎだ」だけでなく「V かけだ」「V ばなしだ」「V たてだ」においても適用することが可能である。6 節では、内項主語構造と結果状態の焦点化の連動関係が、「V すぎだ」以外の統語的述語名詞にも適用可能であることを確認した。

7. おわりに

本稿では、(35a) の現象観察に始まり、(35b) のように「V すぎだ」の意味解釈と意味構造、補文構造の関係について明らかにした。更に、(36) のように結果状態の焦点化と内項主語構造の関係について、補文構造に基づいて意味論的操作が起こるという分析を提案した。そして、(37) のように「V かけだ」「V ばなしだ」「V たてだ」にも「V すぎだ」の議論が適用できることを明らかにした。

- (35) a. 「V すぎだ」の補文構造と意味解釈の可否が連動している。
b. 「V すぎだ」の頻度解釈は、内項主語構造と結果状態の焦点化の対応関係によって説明できる。
(36) a. 内項主語構造においては、外項への主格付与が阻止されることによって、外項の顕在化が抑制される。
b. 内項主語構造においては、外項の顕在化が抑制されるために、意味構造上の動作主が背景化され、それに基づいて結果状態の焦点化が起こる。
(37) 「V かけだ」「V ばなしだ」「V たてだ」の内項主語構造に関しても、結果状態の焦点化によって時空間項をターゲットとする意味解釈が排除される。

特に 5 節では、補文構造と意味論的操作の対応関係について論じる形で、統語と意味の

インターフェイスについて部分的に議論を行った。本稿の議論は、統語構造に基づいて意味論的操作が起こるという点で、統語構造と意味構造の対応関係の捉え方としては影山(1996)に近い分析となっている。一方、三宅(2017)で指摘されているように、語彙概念構造に相当する構造を統語構造に反映することで、統語構造でそのまま動詞の語彙の意味を扱う方向性の分析も存在する。内項主語構造と結果状態の焦点化の対応関係は統語と意味のインターフェイスを論じる上で興味深い題材であり、今後はどのようなモデルで現象を捉えるべきかについても精緻化を行う必要がある。

【参考文献】

- 白杵岳(2011)「「ばなし」構文：語形成と意味のミスマッチ」 *KLS 31 : Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, pp.180-191.
- 影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版.
- 岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版.
- 金水敏(1994)「連体修飾の「～タ」について」田窪行則(編)『日本語の名詞修飾表現：言語学, 日本語教育,機械翻訳の接点』 pp.29-65, くろしお出版.
- 田川拓海(2010)「連体節における状態のタの統語的分析と否定辞の統語的位置」 *KLS 30 : Proceedings of the 34th Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society*, pp.192-202.
- 竹沢幸一・John Whitman(1998)『格と語順と統語構造』研究社.
- 新山聖也(2020)「「ばなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造と外項の削除」 *KLS Selected Papers 2*, pp.71-85.
- 新山聖也(2022a)「複雑述語の補文構造と範疇形式」『日本語文法』 22-2, pp.54-70.
- 新山聖也(2022b)「統語的に形成される述語名詞について」『筑波応用言語学研究』 29, pp.13-26.
- 三宅知宏(2017)「日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって：語彙概念構造と統語構造」森山卓郎・三宅知宏(編)『語彙論的統語論の新展開』 pp.117-134. くろしお出版.
- 宮腰幸一(2009)「「かけ」構文と並行事象構造」『日本語文法』 9-2, pp.36-52.
- 山田昌史(2005)「結果の焦点化：「たて」構文の分析」影山太郎(編)『レキシコンフォーラム No.1』 pp.267-293, ひつじ書房.
- 由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語：モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房.
- 由本陽子(2012)「「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」」影山太郎・沈力(編)『日中対照理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』 pp.123-143, くろしお出版.
- Fujimaki, Kazuma. (2005) "On the position of nominative NPs in Japanese: The possibility of nominative NPs in-situ." *Scientific approaches to language* 4, pp.1-32.
- Nishigauchi, Taisuke. (1993) "Long Distance Passive." In Nobuko Hasegawa (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. pp.79-114 Tokyo: Kuroshio Publishers.